

資 料

パ リ  
—— 誕生から現代まで ——  
[XXIII]

P.クールティヨン 著  
金 柿 宏 典\* 訳注

金持になりたまえ... !(1)

市民王ルイ・フィリップ (1830—1848)

1830年8月9日、フィリップ・エガリテの息子ルイ・フィリップは、修正された憲章に宣誓する。「我々の平穏を確保するため、国王は自らガレー船囚徒の<sup>1)</sup>苦痛を引き受けた、と画家ドラクロワは記している。その職務に対する献身振りには誰もが認める所である。請願者たちが雨後の蝸牛のように地下から出てきている。共和主義を救うもの、それは—— 誰もが確信している国王の善意を除外し —— 勿論、国民衛兵の維持と組織化である。8月27日、日曜の閲兵式の時には既に15,000人の武装兵と新たに編成された歩兵と騎兵がいたのである。」

国王は50歳だった。柔軟で軽快な物腰の彼は、西洋梨型の三角形の顔をしており、頭頂に波打つ髪と両頬にまだ広がっている頬ひげが顔を縁取っていた。初対面の時、この肥った男は、「それは私の意見だから、私はその意見に賛成なのだ」と断言する人物、アンリ・モニエの<sup>2)</sup>描くジョゼフ・ブリュドム<sup>3)</sup>に少し似ているように思える(とはいえほんの少々で全く外見的なものにすぎないのは、国王がブリュドムと違って賢明だからである)。市

---

\* 福岡大学名誉教授

民王はスー・ピエ<sup>4)</sup>付きの浅黄色の南京木綿の長ズボンを穿き、彼の目印である洋傘を手  
に散歩をする。12月に、彼は人々が死刑を求めし貴族院が無期禁錮の判決を下していた  
シャルル10世の時の大臣たちを救ってやる。それに反し、1831年2月13日、サン・ジェ  
ルマン・ロクセロワ教会で正統王朝派のデモが起る。民衆はこの教会に乱入し、掠奪し、  
大司教館へ押しかけそこも荒しまわった。政府は介入を控える。7月の「栄光の」の3日  
間の後では、国王は民衆は何が好きかという事をよく知ったからである。同年の年末に、  
王一家は、王の父フィリップ・エガリテの追憶が余りにも重苦しいパレ・ロワイヤルを去  
り、チュイルリ宮へ移転する。国王はフロール館<sup>5)</sup>とオルロージュ館の間の部屋に住み着  
く。オルレアン公妃<sup>6)</sup>、パリ伯<sup>7)</sup>、ヌムール公夫妻<sup>8)</sup>はマルサン館に住む。王政復古時代、  
「話題の人」こそアングレーム公妃<sup>9)</sup>だった。市民王の宮廷では、王妹アデライード皇女  
だった。彼女は100パーセントのオルレアン派で、ルイ・フィリップに王冠を受けるよう  
決心させた人物である。特徴ある顔立ちで、赤ら顔の彼女は、虹のような華美な服装をし  
ていた。人々は彼女の飲酒癖と兄を余りに愛し過ぎる事を非難した。彼女は一階の自分の  
居住区にタレイランとベルジヨオソ公妃<sup>10)</sup>を受け容れる。痩せていて少々發育不全の  
ように見えるマリ・アメリ王妃<sup>11)</sup>は、ほとんど修道院風といってよい女性たちに取り囲ま  
れていた。宮廷は極めて国際的だった。少しばかりの排外主義が無い訳ではなかったが、  
王宮を受け容れるためには、外国訛が必要よ、とジラルダン夫人は言っている。ヨー  
ロッパのあらゆる町角で偶然出会う旅行者たちが、王宮では愛されたのである。

間もなく、デモや暴動の試みがパリに再び熱狂を与える。コレラが首都を荒す<sup>12)</sup>。毎日  
千人以上の犠牲者がでる。恐怖に駆られたパリ市民たちは薬屋に殺到する。人々は朝刊を  
手に取ると暴動の報告や犠牲者の名前を探すが、その一覧表は毎日長くなるばかりだっ  
た。人々は「死のクローク」である区役所を避け、そこでの結婚式は出来るだけ延期した。  
絶えず通って行く葬列から、人々は目をそらす。劇場はガラガラだった。

1832年6月5日、疫病で死んだ反対党の代議士ラマルク將軍<sup>13)</sup>の葬儀で、オステル  
リツ橋の下、セーヌ川右岸に集合した群衆は、式辞の後、赤い肩帯を十文字にかけ黒衣  
を纏った謎の騎士が出現したのを目撃する。彼は「自由か死か」と書かれた大きな赤旗を  
掲げていた。「共和制萬歳！ ルイ・フィリップくたばれ」の叫びが聞こえ、ラ・マルセ  
イエーズが高唱される間に赤いボンネット帽が出現した。龍騎兵部隊が広場に到着する。  
パリケード、抗戦。3、4百人の共和派が武器を執る。サン・メリ教会<sup>14)</sup>の階段の前で粉  
砕されるまで、2日間、彼らは全部隊の行動を妨害する。

その後、新たな共和派の暴動がトランスノナン街の恐ろしい虐殺<sup>15)</sup>を惹起する。その街では、陰險な軽蔑から、第35歩兵連隊がタンブル地区の無辜の住民を銃剣で刺殺したのである。1835年7月28日、失敗したのだが、コルシカの山師フィエスキの陰謀<sup>16)</sup>が、国王は奇蹟的に無事だったのだが、犠牲者たちを地上に撒き散らすという驚天動地の驚愕をタンブル大通り<sup>17)</sup>に投げつけたのである(14名の死者<sup>18)</sup>)。共和派は常に民衆を決起させようと試みていた。国王に対する種々様々な陰謀は、治世の初期の頃のように市内を散歩する事を国王にこれ以後許さなくなる。ルイ・フィリップは新聞を読んだり、ドミニエ<sup>19)</sup>や『シャリヴァリ<sup>20)</sup>』*Charivari*や『ラ・カリカチュール』*La Caricature*<sup>21)</sup>の漫画家たちが彼を題材にして描いた戯画を眺めて、自分の余暇を過すようになる。

1840年12月15日(ヴァンドーム広場の円柱<sup>22)</sup>の頂上に皇帝像が建立された7年後)、ナポレオンの遺骸がジョワンヴィル親王<sup>23)</sup>によりセント・ヘレナ島<sup>24)</sup>から持ち帰られる。多数の群衆の見守るなか、遺骸は豪華な葬列と共にアンヴァリッドに安置される<sup>25)</sup>。ユゴーはこれを予言していた。

《陛下、貴方は御自分の首都に帰還なされる

警鐘もなく、戦いもなく、争いもなく、恐怖もなく

パリはその百の塔に燈明を点火し

パリはあらんかぎりの大声でもって話させるだろう

鐘を、太鼓を、ラッパを、軍楽隊の吹奏を。》<sup>26)</sup>

かくして「ティエール氏<sup>27)</sup>」Monsieur Thiersの統治が始まる。びよんと立った髪が飾りのような頭をした小男で、皺の寄った広い額、眼鏡を鼻先にかけ、木底靴のような顎をしていた。マルセーユ出身のかつての弁護士は、絶えず新思考を発表し、火のような雄弁の技術で法廷を魅了した。夕食後、政治家は一種の昼寝をする。そのためにサロンを離れる事なく、暗い隅で長椅子に倒れ込むようにもたれこむ。起き上ると、御夫人たちに挨拶し、休憩でリフレッシュし、彼は再び話はじめ、人々を魅了する。「奴は成り上ったのではない。到着したのさ」と彼についてタレイランは言った。

ハインリッヒ・ハイネは、この時代の3人の政治家を記述している。「ティエールは最初可成り烈しく反抗した。彼は最も口数多く反対をする。彼はラッパを吹き太鼓を叩くが、最終的には国王が欲した事をしてしまう。ギゾー<sup>28)</sup>、彼は正理論家である。「全てのための法則」を彼は発見しなければならなかった。モレ<sup>29)</sup>はティエール氏のようなブルジョワ風の容姿も、ギゾー氏のような教育者的むづかしさもない。彼は《貴族国家の人間》だ

が、統治能力を持っている。」

徐々に、騒乱は少くなる。落馬の事故でオルレアン公が死亡した後<sup>30)</sup>、パリは良好な発展を示す。工業と商業は改善される。郊外に工場が建設される。小賣店は豪華な大商店に代った。パリの街区は道路の開通と広場の設置で清潔になる。歩道が造成される。ガス燈<sup>31)</sup>が普及する。ヴィオレール・デュック<sup>32)</sup>により、ノートル・ダムとサント・シャペルの修復が開始される。ブランキ<sup>33)</sup>とバルベス<sup>34)</sup>が先頭に立って活動した反乱者たちを收容するため、ラ・ロケット<sup>35)</sup>とマザス刑務所<sup>36)</sup>が改善される。ルイ・フィリップ橋<sup>37)</sup>、カールゼル橋<sup>38)</sup>、リシュリュウの泉<sup>39)</sup>、サン・シュルピスの泉<sup>40)</sup>、モリエール記念建造物が建設される。マドレーヌ教会<sup>41)</sup>、コレージュ・ド・フランス<sup>42)</sup>、バンテオン<sup>43)</sup>が完成する。最後に、国王がエトワール広場の凱旋門の落成式を挙げる。

## 1848年の革命

「金持になりたまえ... !<sup>44)</sup>」、これがギゾーのスローガンだった。新教徒の先祖を持つ歴史家にして大臣の彼は、鼻の先が尖り、軽蔑したような唇を持ち、物哀しい態度だった。彼は、自分の父が大革命の処刑台上で死んだ事を忘れなかったので、自由派のティエールを前にして明確に保守派である事を宣言する。しかし破廉恥な訴訟<sup>45)</sup>が人気という水を反対党の水車に運んでしまう。内閣は不人気になる。議会ではイエズス会<sup>46)</sup>が討議される。コレージュ・ド・フランスでミシュレの講義<sup>47)</sup>が中止されたのは、彼がドーミエと共にカプチン派のゴランフロを攻撃したからである。これは、ノートル・ダムで、ラヴィニャン神父<sup>48)</sup>が復活祭の聖体拝受の数字を釣り上げ、またラコルデール<sup>49)</sup>が彼らの自由主義に対し極めて評価した講話をする事を妨げなかった。このような雰囲気の中で、短刀で30回も滅多刺されたプララン公夫人の殺人事件が起る<sup>50)</sup>。逮捕された夫の公爵は服毒自殺するのだが、この事は、王政に対して新たな偏見をもたらした。しかも王家はその相続者オルレアン公を失っていたのである。

当時労働者たちは悲劇的運命にあった。「生きる事、それは彼らにとり、死なない事である」と当時の医者が言っている。彼らは屈辱的な衛生状態の中で働いていた。通気の悪い工房、不衛生な工場。彼らの給与はみじめなものだった。1日15から20スーを得るため、彼らは14時間働かなければならなかった。子供たちは6歳から働かされた。そこで、1841年に8歳未満の子供を傭ったり、13歳未満の子供を夜間に酷使する事が禁止さ

れた。更に、無産者階級の改革者たちは労働者たちの搾取についての恐るべき情報を提供し始める事が必要となったのである。当時「社会主義者」の名を冠せられた人々の中で、フリーエ<sup>51)</sup>とルイ・ブラン<sup>52)</sup>は革命を勃発させるための暴力について対立している。しかし彼らのどちらもその主張は傾聴されていなかった。カジミール・ペリエ<sup>53)</sup>はしががないサラリーマンたちに対し「忍耐」patienceと「諦め」resignationを説いている。社会の脅迫を前にして、政府は富裕なブルジョワ層に支持を求め、改革に対して、彼らの偏狭で利己的で、時流に逆行しようとする理念を表明する。反対派が選挙制度改革のキャンペーンを継続している間、政府は信頼されず軽蔑された。改革者の最初の宴会<sup>54)</sup>が、1847年7月9日、モンマルトルのヌヴ・クリニャンクール街<sup>55)</sup>のシャトー・ルージュ<sup>56)</sup>と呼ばれる庭園で開催された。この最初の政治的宴会の起した運動は拡大していく。1848年1月、あらゆる行為で攻撃された内閣は重大な局面に直面する。そこで政府は今や自分の害獣となった改革派の宴会を禁止する決定をした。その宴会の一つが第12区で計画された。警察がそれに反対する。改革派の中を漂流していたティエールはこの計画を認めなかった。「テーブルの下に赤いボンネット帽が垣間見えた... と彼は言った。改革者たちに対して彼は言う、君たちの戦いを私は欲しない。つまり私は敗北するのを望まないからだし、征服者になる事をもっと望まないからである。」しかしながら、多数の代議士が参加している宴会の委員会は抗議し、19日に行う筈だった宴会を2月22日に開催する事を決定した。政府はこの集会に武力をもって対抗する旨宣言する。委員たちはそこで宴会の延期を再びきめた。しかし混乱が拡大する。それを中止することは出来なかった。「ティエール氏」さえも不可能だった。共和派はこの動きをしっかりとつかんでいた。2月22日、国民衛兵や労働者や学生たちのグループが、「改革萬歳！ ギゾーくたばれ！」と叫びながら市内を駆け回った。それは「軽蔑革命<sup>57)</sup>」だとラマルチーヌは言った。23日、運動は拡大する。軍隊が決起する。国民衛兵とパリ警察隊の間で衝突が生じた。国王はこの事を予見していなかった。「悪童2人にひっくりかえされた広場の二輪馬車を、諸君はバリケードと呼ぶのかね」と、国王は愉快そうに口にしていて。国民衛兵の裏切りと増大する叛乱を見て彼は蒼くなった。恐慌がチュイルリ宮に及び、そこでは恐怖に戦う王妃は、国王が感謝しているギゾーを非難した。遅すぎた！ モレは混成内閣を組閣しようとしたが無駄だった。戦闘は続行する。男も女も子供たちも家から家へ張り渡されている、イルミネーションの花飾りの間を駆け回った。人々は大喜びだった。

しかし、大通りでは、トルトニ附近で発砲事件があった。発射したのは誰か？ 誰が命

令したのか？ このような事件の常として、決して判明する事はないだろう。非武装の人々が虐殺された<sup>58)</sup>。それは街の中に撒かれた火薬の口火だった。「復讐だ！ 武器を執れ！」

パリが決起する。警鐘があらゆる教会で打ち鳴らされる。バリケードが構築される。弾丸用の鉛が溶かされる。薬包が製造される。大革命の息吹が新たに首都を吹き渡る。

2月24日、暴動の3日目、国王一家は既に時代遅れになっていたのである。ビュジョ<sup>59)</sup>は広場を押えていたが、パリの広場には1,600ものバリケードが林立していたのである。ティエールは待ち注視していた。ルイ・フィリップの失墜は確実だった。それは一つの体制、一つの統治の終末だった。譲歩に譲歩を重ね、遂に国王は孫のために退位する事となる。しかし、民衆が乱入したチュイルリ宮では銃声が反響していた。部隊が宮殿めがけて進軍して来る。国王一家がサン・クルーに避難する間、血が流される。そして掠奪となる。

オルレアン公妃はその時愛児とヌムール公を同伴し、議会に出席して攝政職を要求する。議会はこの提案を拒絶する。ラマルチヌは臨時政府を提案する。民衆の喝采と共に、かくて政府の使節団は共和政を宣言するため市庁舎に赴いたのである（1848.2.24.）<sup>60)</sup>。

(続 く)

## パ リ

## —— 誕生から現代まで ——

## (訳 注 XXIII)

1) ガレー船囚徒とは、ガレー船の漕ぎ手として使役された囚人を指す。浮浪者、塩の密賣人、密猟者、強盗などの犯罪者がガレー船に送られたが、ナントの勅令の廃止(1685)後は、新教徒たちも送られた。漕役の労働は過酷で、些細な誤失も容赦なく罰せられた。この制度は1748年に廃止され、それ以後、囚人たちは港湾労働や武器製造工場に使役された。因みに、ガレー船とは中世から18世紀まで主として地中海で使用された櫓権の軍艦で、通常は、片側に26本の櫓を備え、1本の櫓に4名乃至6名の漕ぎ手が配備されていた。フランスでは16世紀には既にガレー船に囚人を送っている。

2) Henri Monier (1805-1877) : 文学者、漫画家、俳優。公証人の書記や財務省の会計係を経て、ジロデ(1796-1824)やグロ(1771-1835)のアトリエに通って画技を学び、1825年頃から、ペランジュの『シャンソン』*Chansons*や、ラ・フォンテーヌの『寓話詩』*Les Fables*の挿絵を描いた。1830年に発表した『巷間風景集』*Scènes populaires*とそれに続くシリーズの中で、俗物のブルジョワの典型としての主人公ジョゼフ・プリュドムを登場させ、好評を博した。モニエ自身がこの人物になりきるよう努力したため、最後には、作者が自分の創作した人物に吸収されてしまったといわれる。この他の主要作品は『ジョゼフ・プリュドム氏の栄枯盛衰』*Grandeur et Décadance de M. Joseph Prudhomme* (1852)、『プリュドムの覚え書』*Mémoires de Joseph Prudhomme* (1857) などがある。彼はまた喜劇やヴォードヴィルも発表し、自作に出演している。

3) Joseph Prudhomme : モニエが創造した愚鈍なブルジョアの典型。太鼓腹をつきだしてふんぞり返り、薄い髪の毛をびったりなでつけ、鼻眼鏡に燕尾服、編み上げ靴をはき、空疎な大言壮語を全然反省もなく喋りまくる俗物である。本文中に引用されたものは、彼の口癖の一つの迷文句である。

4) sous-pieds : 靴の裏にかけてズボンなどをとめる、布や革でできた小さなバンドのこと。

5) pavillon de Flore : セーヌ川の下流に沿ってのびるルーヴル美術館の川沿いの翼棟の端の棟で、ロワイヤル橋の袂にある。この橋からよく見える高浮彫「花の女神フロラの勝利」*Triomphe de Flore* が、この翼棟の端にあるパヴィヨンの名の由来である。

この室内には多くの彫刻の傑作が展示されているが、なんといっても圧巻なのは、ミケランジェロが教皇ユリウス 2 世の墓廟のために 1513 年から 15 年にかけて彫った「奴隷」*Esclave* 像であろう。

6) Héléne-Louise-Elisabeth de Mecklembourg-Schwerin, duchesse d'Orléans (1814–1858) : ルイ・フィリップの長男フェルディナン・フィリップ・ルイ・シャルル・アンリ、オルレアン公爵 (1810–1842) と 1837 年に結婚、2 児を産む。長男ルイ・フィリップ・アルベール、パリ伯爵と次男ロベール・フィリップ・ルイ・ウジェーヌ・フェルディナン、シャルトル伯である。夫のオルレアン公がスイイで馬車の事故で死亡 (1842.7.13.) してから二人の遺児の養育に専念する。1848 年の 2 月革命に際し、長男をフィリップ 7 世として即位させようと努力するが失敗、ベルギーついでイギリスに亡命、リッチモンド城で歿した (1858.5.18.)。彼女は聡明で教養深く、ロマン主義文学を愛し、特にヴィクトール・ユゴーと親交を結んだ。ユゴーは彼女を敬愛し、皇太子の即位に尽力したが果せなかった。ユゴーは劇作『リュイ・ブラス』*Ruy Blas* (1838) の中で、公妃に対する愛を主人公に托している。

7) Louis-Philippe-Albert, comte de Paris (1838–1894) : オルレアン公夫妻の長男として、1838 年 8 月 24 日、パリに生れる。最初はパリ伯と称し、アンリ 5 世の死去した 1883 年 8 月 24 日に、フィリップ 7 世を名乗った。1848 年の 2 月革命の時、ルイ・フィリップは退位し、孫のパリ伯を即位させようと願ったが、議会はこれを拒否、オルレアン王朝は一代で消滅した。この時、オルレアン公妃は息子のパリ伯を同伴して議会に乗り込み、王位継承を訴えたが無駄だった。臨時政府は共和制を宣言、オルレアン公一家はル・アーヴル港から英国へ亡命した。パリ伯も同行したのは当然である。彼は後にモンパンシエ公とマリ・ド・ブルボンの娘マリ・イザベル・フランソワーズ・ドルレアンと結婚 (1864.5.30.)、2 男 4 女の父となる。彼が死去した 1894 年 9 月 8 日、長男のルイ・フィリップ・ロベールがフィリップ 8 世と称すが、名ばかりの国王である。フィリップ 7 世はイギリスのストウ・ハウスで死去。

8) Louis-Charles-Philippe-Raphaël, duc de Nemours (1814–1896) : ルイ・フィリップの次男で、1896 年 6 月にヴェルサイユで死去。1840 年 4 月 27 日、ヴィクトワール・オーギュスト・アントワネット・ド・サククス・コブール・ゴータと結婚、4 男 2 女を得た。勇敢な軍人で、アルジェリア遠征で活躍しアブデル・カデルを相手に激闘した (1841)。1848 年の 2 月革命に際し英国に亡命するが、1871 年に帰国、再び軍役に復帰、



オルレアン派と正統王朝派と結集に寄与するが、1886年に退役した。

9) Marie-Thérèse-Charlotte, duchesse d'Angoulême (1778–1851) : ルイ 16 世とマリ・アントワネットの娘で、大革命時代、父国王夫妻と弟のルイと共にタンブル塔に幽閉され、只一人生き残った。1799年6月10日に従兄のアングレーム公ルイ・アントワヌ・ド・ブルボンと結婚した。ナポレオンの百日天下の間、ボルドーに避難した彼女は精力的に王党派を糾合し反ナポレオンの軍を組織して反攻の構えをみせたため、ナポレオンに彼女こそブルボン家の「只独りの男児」と言わしめたのである。教会権力拡張運動の中心人物と目された彼女は、王政復古時代には極めて不人気のため、1830年7月フランスを去り、ウイーン南東45杆の所にある Frohsdorf 城に隠棲、甥のシャンボール伯アンリ(1820–1883)の教育に専念、1851年10月19日にこの城で歿した。シャンボール伯はシャルル 10 世の孫でベリー公の長男。シャルル 10 世の退位とアングレーム公の即位断念により、彼が正式な王位継承者となり、ルイ・ナポレオン没落後は、正統王朝支持派からはアンリ 5 世と呼ばれた。子供がなくて死去したため(1883.8.24.)、王冠はフィリップ 7 世に托された。

10) Cristina Trivulzio, princesse Belgiojoso (1808–1871) : マンゾーニらの理念の下に養育された彼女は、1824年に Emilio Barbian e Belgiojoso 公と結婚するが、間もなく離婚。オーストリーを憎悪していたので、その圧政を逃れるため故郷のミラノを去り、1831年パリに亡命した。彼女は此処でイタリアの自由解放のため、たゆまぬ情宣活動を展開する。彼女のサロンは作家や政治家が蟄集した。1848年ミラノでの蜂起の知らせを受け、すぐさま志願兵部隊を組織し、ローマ包囲戦の間、負傷兵の看護に献身的な活動をした。しかし祖国の統一を目指すサルディニア王カルロス・アルベルトに対し教皇ピウス 9 世やトスカナ大公、ナポリ王らは協力せず、独立派はラデツキー将軍のオーストリー軍に完敗、彼女もトルコに亡命せざるを得なかった(1849)。帰国できたのは1856年のことである。因みにヨハン・シュトラウス(1804–1849)作曲の「ラデツキー行進曲」は、ラデツキー将軍(1766–1858)のイタリアにおける勝利を祝賀したものである。

11) Marie-Amélie de Bourbon (1782–1866) : 父は両シチリア国王フェルディナンド 1 世、母はオーストリー大公妃マリ・カロリーヌ。1809年11月25日、パレルモでオルレアン公、後のルイ・フィリップ 1 世と結婚、8人の子を産むが、彼女は子供たちを見事に教育し、ヨーロッパの王室における模範的な一家をつくり上げた。1866年3月24日、亡命先のクレルモンで死去。

12) パリのコレラは5月になると爆発的に蔓延し、この一箇月で1万人以上の死者が出た。最終的には2万人以上が死亡した。恐怖に駆られた人々は、毒を撒いて病気を広めたという濡れ衣を着られた無実の市民を4人も虐殺したという。警視庁は、飲料水売りや牛乳配達員、ワイン商人などに対し、暴徒たちに襲撃されないよう十分に注意すべし、という通達を出したほどである。コレラ患者が収容されている市立病院オテル・ディユーを訪問した後に発病し死亡した時の首相カジミール・ペリエ（1770-1832.5.16.）の悲劇が、当時のコレラの猛威を物語っている。

13) Jean Maximilien, comte Lamarque（1770-1832）：フランスの軍人。1792年志願兵となり武勲を重ね、フォントラビ占領（1794）で注目され、1801年のホーヘンリンデンの会戦の勝利の後に旅団長に昇進した。オーストリー軍と死闘を繰り返したイタリア戦役に従軍、ガエタ占領（1806）、カブレ砦奪取（1808）で勇名を馳せた。1807年に師団長に昇進、ナポレオンに従ってワグラムの会戦（1809.7.5-6.）で殊勲をたてた。ロシア遠征、フランス戦役にも勇戦、百日天下の時はヴァンデ軍を率いて王党派の蜂起を鎮在した。1815年から18年にかけて国外追放されたが、1828年にランド県から代議士に選出され反政府の野党の自由派の指導者として、王政復古末期の王党派内閣、次に誕生したルイ・フィリップの7月王政にも反対した。1832年6月1日、彼がコレラで死亡した時、彼の葬儀がパリの共和派の反政府暴動（6.5.-6.）の端緒となった。

6月5日、大革命と帝政の象徴であり、左翼陣営の指導者であったラマルク将軍の葬儀は、反政府勢力の政府に対する敵意を宣言する絶好の機会となった。秘密結社、共和主義者、学生たちやナポレオン軍の老兵たちがデモ隊となって結集する。オーステルリッツ橋での葬列の解散の時、即興のアジ演説が行われ、ラ・マルセイエーズが高唱され、共和政萬歳が繰り返された。荒れ模様のどんよりした空の下で、デモ隊と警官隊との小競り合いが勃発すると、それは忽ちのうちに、パリ市の東部地区に拡大し、バリケードが林立したのである。庶民の街であるこの地区は、コレラの猛威にさらされ、更に不況からの失業で手痛い打撃を受けていたため、政府に対する憎悪と不満が渦巻いていた。叛乱の危険を感じた政府は、直ちにラボ将軍の部隊を派遣する。午後8時、蜂起した民衆は、グラン・ブルーヴァールからバスチユ広場を経てセヌ川河岸からサン・チュスタッシュ教会を結ぶ方形陣を構築した。翌6日早朝から戦闘が再開、激戦となったが、装備に勝る正規軍の攻撃は叛徒のバリケードを次々と粉碎、午前中に大勢は決した。国王ルイ・フィリップは解放されたブルーヴァールや河岸を巡視し、国民衛兵の歓呼を浴びた。しかし叛徒はサン-

メリ修道院を核とする最後の陣地を死守、鉛製の樋を溶かして弾丸をつくり、それを小銃につめるためにポスターの紙を使用したのである。共和主義、正統王朝主義者、学生たちから、主義主張は異なっても7月王政に反対することで一致した叛徒たちは、大砲の一斉射撃で焼き倒され、死屍累累の修羅場となった。パリに平穏が戻ったが、800名余の死傷者を後に残したのである。叛乱の再発を予防するため、政府は警戒の手を緩めず、翌7日は全市に戒厳令を施行する。ユゴーは『レ・ミゼラブル』の中でこの死闘を描いている。

14) église Saint-Merri : 第3区から第4区に延びるサン・マルタン街の78番地にある。この教会の前身は6世紀に当時は林間の空地にあったSaint-Pierre-des-Boisという小さな礼拝堂だった。この礼拝堂に、700年8月29日にSaint-Martin-d'Autunの司祭Mérédic、またはMerriが埋葬された。彼の死後、多くの奇蹟が生じたという。ノルマン人撃退に大功のあったパリ司教ゴズランが、884年8月29日に彼の遺骨を豪華な聖遺物箱に収納した。伝説によると、その時サン・メリの骨が宝石の如く輝いたという。この奇蹟を目にした騎士Eudes le Fauconnierなる人物が感激し、礼拝堂の跡地に美しい教会を建立し、彼自身この教会に埋葬してもらったという。11世紀末に教区を持つ教会となったが、この近くに建設された中央市場レ・アールの発展と共に関連する人口も増大し、教会が余りにも狭くなったため、新教会の建設が1515年に開始され、1552年に完成したものが、現在の教会である。ルネサンス時代の建造であるにも不拘、様式は前代のゴシック・フランボワイヤン様式で、ルイ15世時代に修復され、16世紀の見事なステンドグラスの窓が保存されている。1793年に閉鎖され、火薬工場に使用されたり、1797年から1801年までは敬神博愛教のため「交流神殿」Temple du Commerceとしても使用された。

15) トランスノナン街の虐殺：この街はポーブル街に吸収されて現存しない。この街は13世紀初頭に開通し、14世紀以降はシャロン街、トラス・ピタン街などと呼ばれたが、これらの名称はこの街に住んでいた身持ちの悪い女性たちに由来する。現在のポーブル街62番地から64番地に、1266年にランス大司教が館を建設、1322年にシャロン司教が購入、その後何人かの手を経て、最終的にロングヴィル公妃が入手し、1617年のクリスマスにカルメル派の尼僧院を設置した。この尼僧院は高貴な貴夫人たちの寄宿舎になる。大革命時代に閉鎖され、1796年に分譲されてから取り壊され、ダンス・ホールが建築されついで劇場になった。

1834年4月13日の日曜日の叛乱勃発の前夜も、この劇場でヴォードヴィルが上演され

ていた。政府の反動的法案に反対していた共和派は、結社結成の事前許可制を盛り込んだ結社法に、言論集会の自由を弾圧するものとして猛反対した。特に学生や熟練労働者が加盟していた全国的組織「人間の権利協会」Société des droits de l'hommeは、これまでの法の規制から逃れるため、各支部の構成人員を20名以下に分割していた。しかし1834年3月、20人以下に分割されている団体も事前許可制とする新結社法が提案され、4月10日から公布されたのである。これに先立ち、賃上げと労働条件の改善を求めて断行されたリヨンの絹織工たちのストライキが武力で鎮圧され、検挙された職工たちへの苛酷な判決に憤慨した職工たちが共和主義者と協力し武装蜂起をしていた。しかしこの叛乱も忽ち流血のうちに鎮圧されてしまう。リヨンの決起を知ったパリの反政府派は「人間の権利協会」のメンバーを中心に、反政府暴動を断行した。警戒を怠らなかった政府側はすぐさま国民衛兵部隊を派遣、叛乱分子がバリケードを建造したサン・メリ地区のポーブル街、トランスノナン街、ウルル街などを包囲攻撃した。大革命の理想を実現しようという共和派や自由主義者の叛徒たちは、死も恐れぬ情熱を抱いていた信念の人たちばかりだったが、残念ながら準備不足の上に各々の結社間の連絡も不十分で、参集したのは僅か400名余であった。これに対し鎮圧部隊はパリのみならず郊外からの国民衛兵も参加し、4万人に達した。大砲の集中攻撃で急造のバリケードはまたたく間に粉砕され、叛徒たちもほぼ全員が戦死した。

鎮圧に当たった第35連隊の兵士たちが残敵の掃討に従事していた時、トランスノナン街12番地の家の窓から狙撃されたという。兵士たちはドアを破って乱入し、その家にいた老弱男女はいわずもがな、ベッドで苦痛に呻吟していた病人まで20名を虐殺したのである。この人たちは叛乱分子でなく全く無実の一般庶民であり、後日の捜査により発砲は無かった事が証明された。この惨劇は光輝あるフランス軍の汚点として記録され、指揮官のトマ・ロベール・ビュジョ将軍(1784-1849)は屠殺者の烙印を押され、パリ市民から憎悪された。

16) Giuseppe Fieschi (1790-1836)：フランスの叛逆者。羊飼から兵士になるが、窃盗と欺詐で告発され、しばらく警察の密偵として働いた。金に困っているうち共和主義の友人に感化され、国王暗殺の陰謀に参加した。その正確な動機は不明だが、自分のそれまでの不幸な人生もこの世が悪い故で、世直しのために国家元首の命を狙ったと推測される。賣名目的もある自暴自棄からだろうか。

1835年7月28日、1830年の7月革命の勃発した栄光の3日間、7月27日、28日、29

日を祝賀するため、国王ルイ・フィリップは、バスチーユ広場に赴く途中、サン・マルタン門からシャトー・ドー（現在の共和国）広場に沿って整列している国民衛兵部隊を閲兵するため、タンブル大通りに馬を進めていた。50番地の家の前にさしかかった時、最上階の屋根裏部屋の窓から白煙と轟音と共に弾丸が発射された。国王は左肘に衝撃を受けたが、額に小さな掠り傷を負っただけで無事だった。しかし随行していた軍人や警護の兵士が18名即死し、負傷者は23名にのぼった。死亡した士官の中にトレヴィス公爵で元帥のモルティエ将軍（1768-1835）がいる。ナポレオン麾下の勇将であった彼はルイ・フィリップの信任厚い側近として首相の要職にあったため、国王は彼の不慮の死を大いに痛んだ。

国王狙撃に使用された凶器は、フィエスキの考案によるもので、小銃25挺を並べ台の上に固定し、窓から下の街路を一斉掃射するよう傾斜をつけてあった。しかし残念ながら、国王には命中しなかったのである。フィエスキはこの「地獄の仕掛け」を発射後、用意してあったロープで裏庭に降りて逃走を計ったが、間もなく逮捕された。というのも、発射の際に銃が暴発し、彼自身が重傷を負っていたからである。額の皮膚が裂けて垂れ下さり両眼にかぶさっていたという。彼は共犯のペパンとモレと共に1836年2月19日ギロチンで処刑された。

17) boulevard du Temple : 第3区と第10区にまたがり、フィーユ・デュ・カルヴェール街とレピュブリック広場を結ぶ、長さ405米、最狭幅36.5米の大通り。1656年から1705年にかけて建設され、北側に3列、南側に2列の大木を並木にし、広い歩道をつけたので、すぐにパリ市民の人気の遊歩道になった。菓子店、キャバレー、カフェ、屋台など、そぞろ歩きの人々を対象とするさまざまな店が並び、更に、最初は天幕を囲にしたバラックの芝居小屋も出現、次には本格的建築の大劇場が建設され、首都随一の繁華街となった。1791年には、このバラックの芝居小屋は一ダースにもなり、喜劇、悲劇から血みどろ惨劇や犯罪劇を上演して観客を魅了し、犯罪大通りの異名をもらったのである。

本格的な劇場として注目されるのは、théâtre Déjazet, théâtre Lazzari, théâtre de M<sup>me</sup>Saqui, théâtre des Funambules（後のthéâtre de la Gaîté）、théâtre d'Audinot（後のthéâtre l'Ambigue-Comique）、Folies-Dramatiques, Cirque Olympique, théâtre des Pygmées, théâtre Historique などである。最後のイストリック座は、アレクサンドル・デュマが小屋主で、1847年2月20日が柿落し、演し物は『マルゴ女王』*La Reine Margot* だった。これは大好評で、入場するため観客は2日2晩行列して待たねばならなかった、といわれる。この劇場は2月革命の時に閉鎖され、1848年に再開し

た時は Théâtre-Lyrique と改名している。

18) 死者 14 名としているが、他の複数の参考書はどれも死者 18 名としているので、14 名は誤りと思う。

19) Honoré Daumier (1810–1879)：フランスの画家、戯画作家。油絵、デッサン、石版画、彫刻にも秀でた。当時のブルジョワ社会の痛烈な諷刺と清新辛辣なペンで庶民の姿を活写した。『シャリヴァリ』紙や『カリカチュール』誌に作品を発表、その皮肉と猛烈な批判は多く訴訟事件を惹起したが、特に「ガルガンチュ」*Gargantua* と題して膨大な予算を呑み込む国王を描いた作品は、ドーミエに 6 箇月の入獄という筆禍となった。またラ・フォンテーヌやモリエールの作品に秀技な挿絵を描いたが、セルヴァンテスの『ドン・キホーテ』の挿絵は注目される。48 年の 2 月革命後は真面目な油絵の作品も残している。晩年は失明し (1875)、コローなどの援助を受けたが、悲惨な死を迎えた (1879.2.10.)。

20) *La Charivari*：1832 年諷刺画家 Philippon が発刊した日刊の政治諷刺新聞。7 月革命は検閲制を廃止したが、一般市民はこの王政に大いに不満だったため、新国王ルイ・フィリップがその槍玉にあげられ、彼の特徴ある西洋梨の形をした頭が戯画の絶好の題材になった。この新聞は戯画を別刷付録としたり本文中に掲載して大好評を博し、全ヨーロッパに輸出され、愛読者のバルザックやゴーチエも記事を發表している。ドーミエの他にグランヴィル (1803–1847) やガヴァルニ (1804–1866) らが活躍した。1852 年に紙面が更新されたのは、新皇帝ナポレオン 3 世に諷刺の対象を見い出したからである。1893 年に終刊。

21) *La Caricature*：1839 年、『世紀』*Siècle* 紙主幹デュタックにより創刊された、モラル、法律、文学、美術、ファッション、演劇を扱う総合誌で、毎週日曜日に発賣された。検閲の強化と「シャリヴァリ」紙の成功の後塵を拝して、この新刊誌の成功は最初疑問視されたが、現代の悪徳と滑稽の忠実な鏡たらんとする編集方針で最も精神的な人々を讀者として獲得するという販賣目的により存続し得たのである。文芸雑誌としての特性が強かったので、バルザック、デュマ、ゴーチエをはじめジュール・ジャンン、アルフォンス・カール、フレデリック・スーリエ、ポール・ド・コックなどの人気作家が執筆し、コラムでは文学界のゴシップ、作家達の近況を報道して讀者を魅了した。また『シャリヴァリ』で活躍しているフィリポン、ドーミエ、アンリ・モニエ、グランヴィルらも作品を掲載し、特にドーミエは代表作となる『ロベール・マケール』*Robert Macair* シリーズを連載して

評判を呼んだ。年刊購読費 40 フランのこの雑誌は、『世紀』紙の本社のあるクロワッサン街 16 番地のコルベール館に同居していた。これらの成功にも不拘、何故か数年後に姿を消してしまった。

22) ヴァンドーム広場の円柱：ヴァンドーム広場にはルイ 14 世の像が立っていたが、1792 年 8 月 12 日に倒され溶解されてしまった。1803 年にナポレオンはこの跡地にアーヘンにあるシャルルマーニュの銅像を移転させようとしたが、大軍団の榮譽を賞揚するため、オーステルリッツの勝利で捕獲した敵軍のオーストリーとロシア軍の大砲 1250 門を原料として溶解鑄造し、高さ 44 米の円柱を建立した。円柱を螺旋状に取り巻いて 76 の浅浮彫が 1805 年の戦役の大軍団とその兵士を武功を称える場面を示している。頂上にナポレオンは余り気がすまなかったが、ローマ皇帝の姿をし月桂冠を戴いたショデ作の立像が据えられた。完成式は 1810 年 8 月 15 日である。

1814 年 4 月 8 日、この像は引き降ろされ、ブルボン家の白旗が掲揚される。1818 年にルモガブローニュ・シュル・メールのナポレオン像とデゼ將軍の銅像を溶かし、ボンヌフのアンリ 4 世を再現する。円柱の上には巨大な百合の花が飾られた。ルイ・フィリップの治世となった。1883 年 7 月 28 日、シュール作のナポレオン像が再び据えられる。ナポレオンは軍装で三角帽をかぶっていた。この円柱は、パリ・コミュヌの乱の時、1871 年 5 月 16 日、画家クールベの発議で倒される。しかし 73 年 5 月 30 日に円柱は再建されるが、破壊の張本人とされたクールベが再建費用を負担しなければならなかった。35 萬フランの巨額の出費は彼を破産させ、命を縮めさせたのである。

クールブヴォワ作のナポレオンの新しい像は『ちびの伍長』le petit Caporal と呼ばれたが、第 3 共和政の政府により、ヌイイ橋上流 37 米の所のセーヌ川に投棄された。プロシャ軍がヴェルサイユを占領した 1870 年 9 月 17 日のことである。1871 年 1 月 23 日、建築家ルフェエルの手により回収され、後にアンヴァリッドの正面内庭に据えられたのである。

23) François-Ferdinand-Philippe-Louis-Marie d'Orléans, prince de Joinville (1818—1900)：ルイ・フィリップの 3 男で海軍士官。そのため 1840 年にセント・ヘレナ島へナポレオンの遺灰を引き取りに行く任務をまかされた。1844 年のモロッコ戦争に際しては遠征艦隊を指揮、アブデル・カデル (1807—1883) の援助を断念させるためモロッコ軍をダンジール港で砲撃した (1844.8.6.)。この艦砲射撃は 8 月 14、15 両日のイスリとマガドールでの陸上戦での敗北によるモロッコの降伏を促進した。かくて 9 月 10 日、フランスとモロッコは平和條約に調印する。1846 年に海軍中將に昇進。ギゾーに対する彼の

反対姿勢は市民の人気の的となる。2月革命の勃発のためイギリスに亡命（1848.2.24.）、アメリカの南北戦争に参加、ジョージ・マクレラン将軍（1826-1885）の幕僚として北軍の勝利に貢献した。1870年の普仏戦争の際は偽名で参戦したという。ヴェルサイユの国民議会の議員となり（1871-75）、海軍中將に復職するが、皇族追放令により退役させられた（1886）。『回顧録』 *Vieux souvenirs*（1894）を残した。

24) île Sainte-Hélène, Saint Helena Island : アフリカ西岸 1851 軒, アサンシオン諸島の南東にあり, 熱帯地方の大西洋の孤島。面積 1222 平方軒, 人口 4.600 人, 首都は James Town。1502 年 5 月 21 日, ポルトガルの航海家 Joao da Nova Castella が発見した。この日が聖女ヘレナの祝日だったため, 彼女の名がこの新発見の島につけられたのである。1645 年から 51 年までオランダ人が占領したが, 1659 年にイギリスの東印度会社が支店を設立し, 1673 年にイギリスがこの島の専有権を所得した。17 世紀末期, この島の住民の半数は黒人奴隷だったが, 1810 年以降は東印度会社の使用人として中国人も移住して来た。1834 年正式にイギリスの領土となり, 印度航路の重要な中枢墓地となったが, 蒸気船の出現とスエズ運河開通（1869）により, その重要性を全く失った。ボア戦争の時, イギリス政府は数千人の捕虜をこの島に移送している。第 2 次大戦中, 一時的だが, この孤島も戦略的重要性を回復している。

1815 年 6 月 18 日, ワーテルロー会戦でウエリントンに破れたナポレオンはイギリス亡命を決意, 7 月 15 日早朝ロシュフォール沖に碇泊中のベレロフォン号に収容された。連合国は敗残の皇帝の処分をめぐって会議を重ね, エルバ島の失敗を繰り返さないため, 脱出不可能の絶海を孤島セント・ヘレナ島への流刑を決定した。ナポレオンは少数の側近と共にイギリス海軍のノーサンバーランド号に乗船, 1815 年 8 月 7 日に出発, 10 月 15 日にセント・ヘレナ島に到着した。ナポレオンはこの熱帯の孤島で湿気や酷暑に苦しみ, その上監視役だったハドソン・ロウ総督（1769-1844）の敵意に悩まされ, 1821 年 5 月 5 日午後 5 時 49 分に死去した。死因は胃癌であるが, 毒殺説も根強い。ナポレオンはこの島で生活している間, 側近の者に回想録を口述筆記させたが, その中でもラス・カーズ伯爵（1766-1842）の編集による『セント・ヘレナ日記』 *Mémorial de Sainte-Hélène, ou Journal où retrouve consigné jour par jour, ce qu'a dit et fait Napoléon*（8 vol, 1822-23）が傑作で, 熱烈なナポレオン崇拝者であった著者は, 不滅の殉教者, 不世出の軍事的天才としてのナポレオンを流麗な文体で描きだし, ナポレオン伝説の源泉となった。皇帝をライヴェル視したシャープリアンからより若い世代のユゴーやスタンダールらは英雄



として賛美し、ボナパルティスムは愛国心を掻き立てた。彼の遺灰の帰国は、フランスに再びナポレオン崇拜の思潮を噴出させたのである。

25) ナポレオンの遺灰の帰国：1840年3月1日、首相に再任されたティエールは政権維持の手段としてボナパルティスムを利用しようとした。彼はイギリスと交渉しナポレオンの遺骸の返還を要求する。これまで親英的外交を展開していたティエールに対し、彼の内閣の継続を欲していたイギリスは彼の要請を承諾したのである。ティエールは議会に皇帝の遺骸引き取りのための予算100万フランの支出を可決させた(1840.5.12.)。ルイ・フィリップはナポレオン崇拜熱が民衆に伝播するのを恐れたが、ティエールは選挙権の無い彼らを心配する事はない、と国王を説得、皇太子オルレアン公もティエールに同調したため、5月12日、内務大臣レミュザの名で、皇帝の遺骸の帰還を公表、同時にナポレオンを「わが国の正統な君主」であったとして、皇帝の名誉回復を公式に確認したのである。この背景には、1821年にナポレオンが死去してから、皇帝関係の文献の出版が相継ぎ、特にラス・カーズ伯の『セント・ヘレナ日記』がベスト・セラーとなり、軍事的栄光に包まれた英雄であると同時に多くの改革をなし遂げた偉大な政治家としてナポレオンが広く民衆に賛美されていたからである。またナポレオンは大革命の理想の守護者であり実行者である人物としても理解され、ボナパルティスムは自由派、共和派の左派から王朝派の進歩分子までもシンパとしたのである。

1840年7月7日、ルイ・フィリップの3男ジョワンヴィル親王を団長とする遺骸引き取りの使節団はフリゲート艦ラ・ベル・プール号に乗船して出港、10月15日セント・ヘレナ島に到着、ハドソン・ロウ総督の悪意から墓碑銘もない粗末な石板に覆われただけの墓から皇帝の遺骸を発掘、18日に出帆し、11月30日にシェルブール港に到着した。ここから皇帝の棺は壮麗な葬列を組んで、途中多くの国民の歓呼を浴びながら、12月15日アンヴァリッドに安着したのである。棺は皇帝にふさわしい墓が出来るまでサン・ジェローム礼拝堂に安置される。建築家ヴィスコンティ(1791-1853)の手になる現在の墓に移葬されたのは1861年のことである。

26) この詩句は『皇帝の帰還』*La Retour de l'Empereur*の第1部第9聯の2行(81-82行目)と第12聯の3行(93-95行目)のものである。引用の2行目の下に点線を入れこの5行は、聯ではない事を明示すべきである。

この長詩は、1840年12月14日にデロワ書店から仮綴じの小冊子の形で出版された。書店の代表者Duriezによる「編集者のはしがき」*Avis des éditeurs*は、これまでナポ

レオンを賛美した多くの作品を発表してきたユゴーの最新作で、ナポレオン叙事詩の集成であり、歌われている愛国的理想と名誉は読者を深く感動させるであろう、と述べている。この「はしがき」は作者ユゴーの意見を代筆したものであり、特に「ナポレオン叙事詩」*épopé napoléonienne*なる表現はユゴー自身の表現であろう、とジャン・マサンは解説している（Le Club Française du livre 版ユゴー全集第6巻128頁）。この作品は、1883年に出版される『詩世紀の伝説』*La Légende des Siècles*決定版に収録される。因みにナポレオン叙事詩に分類される作品の中で、1840年までに出版された有名なものは次のような作品である。

「彼」*Lui*：『東方詩集』作品40，1827-1828。

「ヴァンドーム広場の円柱に寄す」*A la Colonne de la place Vendôme*：『オードとバラード集』作品Ⅲの7，1827年2月。

「少年時代の想い出」*Souvenir d'enfance*：『秋の木の葉』作品30，1831年11月。

「円柱に寄す」*A la Colonne*：『薄明の歌』作品2，1830年10月。

「凱旋門に寄す」*A l'Arc de triomphe*：『内心の声』作品4，1837年2月。

1840年以降もユゴーは多くの作品でナポレオンを描き続けている。1860年にユゴーはナポレオンを「意識せざる偉大なる革命家」*grand révolutionnaire involontaire*と記している。『懲罰詩集』（1853）の中の「贖罪」*L'Expiation*、『レ・ミゼラブル』のワテルローのナポレオンは、ユゴーの歌い描いたナポレオン像の傑作である。

ユゴーはこの小冊子をティエールに贈り、次のように記している。「小生が尊敬しかつ敬愛する方へ。貴方の精神は私の精神を魅了する精神の一つです。」しかし残念ながらナポレオンの棺が祖国に帰還した時、ティエールはすでに首相の座を追われていた。1840年10月20日、彼は辞職し、内閣は瓦解している。

27) Louis Adolph Thiers (1797-1877)：政治家、歴史家。弁護士から新聞記者へ(1821)、自由主義的ブルジョワの立場からシャルル10世の反動政治を批判、『フランス革命史』*Histoire de la Révolution française* (1823-27, 全10巻)を発表、オルレアン派を支持。『ナショナル』紙*Le National*を創刊(1830)、7月革命実現のために努力した。7月王政成立と共に内閣に参加、首相となるが(1836)、スペイン問題で国王と対立、ギゾーと交替する。以後、共和主義的ブルジョワの中央左派の指導者として反政府派となり、2月革命の実現に献身した。ルイ・ナポレオンのクー・デタ(1851.12.2.)に反対して亡命したが、翌年に帰国し代議士となり、普仏戦争に反対、ナポレオン3世の敗北

後、国民議会により行政長官に任ぜられ、パリ・コミューヌを弾圧した、第3共和政初代大統領に就任した(1871-73)。敗戦処理をめぐって、王党派、保守派の反対に会い、大統領を辞職したが、1875年の総選挙で共和派は僅差で勝利し、第3共和政の基礎を固めることができた。

ティエールがナポレオンの遺骸返還をイギリスと交渉したのは、1840年3月1日に彼が第2次内閣を成立させた時である。しかしながらこの内閣は短命で、同年10月20日には退陣しなければならず、返還の偉業達成という成果は次のスールト内閣の手柄になってしまった。

28) François-Pierre-Guillaume Guizot (1787-1874) : ニームの新教徒の家に生れ、父は反革命分子として処刑された。1805年に上京、法学について文学を学び、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』*The History of the decline and fall of the Roman Empire*を訳し、ソルボンヌの近世史教授となった(1812)。ロワイエ・コラルールと共に正理論派 *doctorinaire* を組織、その指導者となる。彼は穏健な民主主義の立場をとり、左右両翼の過激派の間を行く中庸 *juste milieu* を市民的自由を通じて実現しようとした。王政復古下の反動政府に抗議して大学を辞任(1820)、イギリス議会制と革命の研究に没頭した。7月王政成立と共に内閣に参加、1848年の2月革命までフランスを統治した。1年間のイギリス亡命の後に帰国、以後は歴史研究に専念した。文明史の概念を歴史学的に確立、社会学的分析もとりいれ、フランス近代史学の創始者の1人と目される。『イギリス革命史』*Histoire de la Révolution d'Angleterre* (1826-1856)、『フランス文明史』*Histoire de la civilisation en France* (1830)などの著書がある。

29) Louis Mathieu, comte Molé (1781-1855) : 法曹家の名家モレ家の出身。裁判所長の父は、1794年に反革命分子としてギロチンで処刑された。エコール・ポリテクニクに入学した彼は『道徳及び政治試論』*Essais de morale et de politique* (1806)で立法院議長フォンターヌ(1757-1821)に認められた。ナポレオンは彼を重用し、コート・ドール県知事に登用した。土木建築総監から法相に相当する大判事 *grand juge* に任命(1813)された。しかしモレはナポレオンと袂別、ブルボン王朝に恭順、海相(1815-18)となるが、自由主義に傾斜し、7月王政では外相に任じられた(1830.8.-11.) 彼は外国への不介入主義を取り、一部の過激派を除く議会の信任を得た。スペインの内乱にイギリスと共に介入しようとした好戦的なティエールが失脚し、モレが後継内閣の首班となった(1837.4.15.-1839.5.12.)。彼は文相のギゾーをはじめ正理論派の閣僚を罷免したため、ギ

ゾーは正理論派の同志と共に野党陣営に走った。国内外の平和を願っていたルイ・フィリップは親英路線を採っていたが、このような平和主義は優柔不断で卑怯者の態度にみえた。1832年から中部イタリアの港湾都市アンコナに駐留していたフランス軍の撤退を決定(1838)した事は、それまでの努力を水泡に帰すものと非難された。国王の意に沿いすぎ、余りに権力を委任しすぎるとして、野党陣営は結束してモレを攻撃した。彼らのスローガンは、国王は「君臨すれども統治せず」というティエールの主張だった。39年2月2日、反撃のためモレは議会を解散、選挙に己の信を問うた。しかし3月2日の投票結果は敗北だった。モレの与党は200名が当選したが、野党連合は240名を当選させたのである。その後の彼はアカデミー・フランセーズの会員に選出され(1840)、ジロンド県選出の議員として(1848-51)、右派に屈し普通選挙を制限する法案成立に協力している。ルイ・ナポレオンの1851年12月2日にクー・デタに対しては、パリ第10区区役所に集合した議員団に参加した。その後は故郷のChamplatreuxの居城に引退し晩年を過したが、1855年11月24日、脳卒中により急死した。政敵のティエール、ギゾーに比較すると残念ながら2流の政治家といえよう。

30) ルイ・フィリップの長男Ferdinand-Philippe-Louis-charles-Henri, duc d'Orléansは1810年9月3日にパレルモで生れた。7月王政の成立と共に当然ながら皇太子になり、次の国王と目された。教養ある美青年の彼は誰からも敬愛されていた。1842年7月13日、スイに滞在していた母后マリ・アメリ・ド・ブルボンを訪問するためパリを出発した。しかし馬車はとても軽く、馬たちは若くて十分に調教されておらず、さらに馭者も経験不足という不幸が重なった。郊外に出てレヴォルト街道を出た時、馬たちが暴走を始め、馭者はそれを押えることが出来なかった。危険を感じた皇太子は馬車から飛び降りたが、不運にも転倒し敷石で頭を強打してしまった。すぐ前の薬屋に運び込まれたが、頭蓋骨骨折の重傷で意識を回復することなく絶命したのである。彼の死は深い同情をひきおこしたが、正期王朝派のみは冷淡だったという。

31) ガス燈 le reverbère à gaz : ガス燈の原理は、土木技師だったフィリップ・ルボン・ダルベルサン(1769-1804)が、おが屑をつめたフラスコを熱している時、フラスコから出る「煙が火になった」事象を発見した事から認識された。彼はフラスコから発したガスが鮮光を発して燃焼するのを見て、ガスによる照明という着想を得たのである。彼は照明と暖房にガスを利用した実験の結果を科学アカデミーに報告し、この件に関する特許を1799年9月21日に取得した。しかし実際にガスによる照明の利用は、イギリスの発明家

ウィリアム・マードック William Murdock (1754-1839) が、石炭乾溜の実験から得たガスにより、自分の事務所を照明した (1792) のについて、石炭ガスの貯蔵と精製に成功し、工場の一部をガスで照明した (1802) 事に始まる。

ルボン・ダンベルサンはこの後、政府によりガス研究を認められ、ルアン近郊のルーヴレーの森で実験を續行、ガスによる内燃機関の研究にも手をひろげて特許を得た (1799)。この着想はきわめて秀抜であったが、実際の計画が粗雑で、この機関は作動しなかったという。その後、彼はナポレオン 1 世の戴冠式の会場であるノートル・ダム大寺院の照明のためにパリに招かれたが、式の翌日、1804 年 12 月 3 日、シャン・ゼリゼ通りの茂みの中で変死体となって発見された。

32) Eugène Emmanuel Viollet-le Duc (1814-1879) : 建築家、中世美術史家。1839 年にナルボンヌの大聖堂修築工事にあたって以来、ヴェズレーの協会、カルカッソヌの城塞、パリのノートル・ダム大寺院、トゥールーズのサン・セルナン教会、サン・ドニヤミアンの大聖堂など、フランスの代表的な中世建築の重要な修復工事に従事した。彼の方針は、建物を創建当時の様式に統一する、という事であった。彼自身は極めて慎重かつ細心であったが、追従者や模倣者が多かったため、19 世紀後半には修復という名目で、中世建築が少なからぬ損傷をうけた。著書に『11-16 世紀フランス建築精解辞典』*Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI<sup>e</sup> au XVI<sup>e</sup> siècle* (1854-69, 全 10 巻) などがある。

33) Louis Auguste Blanqui (1805-1881) : フランスの革命家。法律と医学を学んだが、革命家たる天性を自覚、1824 年には既に秘密結社カルボナリ党に加入、フォーブール・サン・タントワヌの暴動に参加して負傷 (1829)、さらに翌 30 年の 7 月革命の時にもバリケードに立て籠った。成立した 7 月王政のブルジョワ的保守性に幻滅、政権打倒の陰謀を繰り返し、逮捕投獄を経験した (1832, 1836)。出獄の後、1838 年にバルベスらと『四季協会』*Société des saisons* を結成、1839 年 5 月 12 日の暴動を起した。半年後に検挙され死刑の判決を受けたが、無期禁錮に減刑され、1848 年の 2 月革命により釈放された。すぐに彼は共和派の団体に加入しリーダーとなり、労働者の待遇改善を主張し、その実現のため労働者の武装化と団結権の承認を求めた。最も注意すべき危険分子として政府から監視されていたが、その迫害にもめげず、1848 年 5 月 15 日、ポーランド救援の請願デモを政権打倒の暴動に煽動しようとして逮捕され懲役 10 年の判決を受けた。59 年に釈放された後も過激分子、不穏分子として逮捕投獄され (1861)、ベルギーに脱走 (1865)、

その間も革命運動を續行した。1870年に帰国、4,000名の革命軍を組織、ナポレオン3世の降伏を知るや、10月31日に市庁舎の占拠を試みた。1871年5月、ティエールの命令で逮捕されたため、パリ・コミューンには直接参加できなかったが、労働者の権利の確立を目指す彼の理想は、パリ・コミューンの人々に受け継がれた。再び無期懲役の判決を受けたが、1879年の恩赦で出獄、晩年は『神もなく親方もなし』*Ni Dieu ni maître*と題する日記を書いてすごした。33年間を獄中で過した闘士は暴力主義の化身とみなされている。死後に出版された『社会批評』*Critique sociale* (1885)が最も重要な著作である。

34) Armand Barbès (1809-1870)：ゲダグループ生れのフランスの政治家。父から莫大な財産を譲られ、1830年パリに上京、共和派のリーダーとなり、フィエスキのため火薬を製造したとして禁錮1年の判決を受けた。1839年5月12日、ブランキやマルタン・ベルナルらと共に謀した叛乱により死刑の判決を受けたが、ヴィクトール・ユゴーらの減刑運動により、無期懲役となり服役していたが、1848年の2月革命により釈放され、オーブ県より代議士に当選、ルドリュ・ロランらと共に極左派を形成した。しかし同年5月15日の騒乱の責任者として再び無期懲役の判決を受けた。1854年のナポレオン3世による恩赦を拒否、脱獄してオランダに亡命、1870年6月26日ハーグで客死した。

35) prison de la Petite-Roquette：パリ第11区ロケット街143番に、1832年に新築され、矯正教育本部 Maison centrale d'Education correctionnelle と呼ばれた。若い囚人を共同作業により更生しようとの試みがなされたが失敗して (1836)、元通りの独房に拘禁するようになった。1935年には、サン・ラザール刑務所で教育された女囚を収容した事もある。刑務所は取り壊され、跡地は低家賃のアパート群が建っている。

旧ロケット刑務所はパリで実行された死刑のほとんどを執行しており、脱走不可能な厳重な監視体制と苛酷な規則で犯罪者に恐れられていた。また費用を自弁で支払い食事などの特別待遇を受けられる「実費独房待遇」la pistole はなかったのも、貴族やブルジョワの囚人たちには辛い牢獄だった。囚人は5時起床、1日10時間労働、食事時の休憩、午後7時半就寝、鉄製のベッドだけの独房で夜を過ごした。1851年から死刑の執行は刑務所の門の前の狭い広場で公開された。敷石の中にそれと同じ高さに四角形に埋められた5つの石がギロチンの土台だったのは、普断は一般の人は誰も気づかずにこの上を歩いていた。ギロチンは夜の間に建てられ、死刑執行は早朝だったが、処刑台が死刑を予告する絶好の広告塔となり、早朝にも不拘、その都度多くの見物人を引き寄せた。冬の厳寒にも、最前列で死刑囚の首が転がり落ちるのを見るために徹夜して場所を取る若者たちも多かった。

処刑された有名な死刑囚は、1858年1月14日、ナポレオン3世を襲撃した暗殺犯のフェリス・オルシニ、毒殺魔のラ・ボムレ医師、パリ大司教シブールを暗殺したヴェルジュ司祭などがある。死刑囚は処刑前夜は特別な独房で過し、翌早朝に刑務所の門を出るのだが、この外出は冥土への首途に他ならなかった。またこの刑務所はパリ・コムーヌの時、人質として収容されていたパリ大司教ダルボワと10名の聖職者、35名の憲兵、4名の「裏切者」なる囚人がパリ・コムーヌの兵士によって銃殺された(1871.5.24.)。1837年に建造されたこの刑務所は、4階建の監房棟2棟に500名の囚人を収容、1899年までは死刑囚も拘留した。1900年に取り壊されたが、ギロチンの5つの礎石は残っている。

36) prison Mazas : 現在ではデイドロ大通りと呼ばれているが、1814年の開通から1879年まではマザ大通りと呼ばれていた通りの23番地から25番地の敷地を占めていた。1805年12月2日のオステルリッツの会戦で勇敢な戦死を遂げたジャック・フランソワマルク・マザ大佐(1765-1805)を記念して、この通りに命名された。独房システムのこの刑務所は、当時の近代的な建物で、中央看視塔から放射線状に4階建の監房棟が6棟配置されていた。独房数は1199部屋、独房は高さ2.6米、幅1.85米、奥行き3.85米で、床は煉瓦だった。1845年着工、完成は1850年で、完成式は同年5月19日に挙行された。その日から、旧フォルス刑務所の囚人841名が収容された。1851年12月2日のルイ・ナポレオンのクー・デタの時、その前日から予防拘禁されていた反対派の大名たち、オディロン・バロー、プロイ公爵、ヴォゲ伯爵、リュイーヌ公爵らが収容された。この刑務所は、1898年に取り壊されるまで1人の脱走も許さなかった、という名誉ある記録を持っている。

37) pont Louis-Philippe : 右岸の市庁舎河岸とサン・ルイ島の下流の先端のブルボン河岸を結ぶ。ルイ・フィリップが礎石を据えて、1833年に完成したこの橋は、2本の張り間を持った鉄橋の吊り橋で、一つの張り間は71.13米、もう一つの張り間72米あり、全長216.5米、幅8米であった。1848年の2月革命でルイ・フィリップが失脚した後は「改革橋」pont de la Reformeと一時的に改名された。1848年に火災にあって一部が消失し、これはすぐに改修されたが全体的に老朽化し傷みが激しかったため、現在の石橋に架け替えられた。1862年のことである。厚さ4米の2本の橋脚で支えられた3本のアーチは全て幅30米ある。中央のアーチの水面からの高さは8.35米、兩岸のアーチの高さは8.33米である。この橋はパリの中心にある割には興味ある話題を全くといってよいほど持っていない。通行人もサン・ルイ島の住人が主でありあまりいない故もあろう。

38) pont du Carrousel : 右岸のチュイルリ河岸と左岸のヴォルテール河岸を結ぶ。現

在の橋は鉄筋コンクリート製で、1936年から39年までの工事で完成した。これ以前の橋は鉄橋で3つの橋脚を持ち、1831年から34年にかけてポロンソアの指揮で完成しているが、この橋は現在の橋よりもう少し上流にかけられていた。幅11.8米、全長169.5米だった。人口稠密になった兩岸の交通連絡の便のための橋だったが、7月王政になり最初に完成したもので、1834年10月30日の完成式には、国王ルイ・フィリップ自身が直々に出席している。橋の四隅に彫刻家ブティト（1794-1862）の手になる「豊饒」*L'Abondance*、「産業」*L'Industrie*、「セーヌ川」*La Seine*、「パリ市」*La Ville de Paris*を示す彫像が飾られ、人目をひいた。建造費用は橋本体だけで38萬フランかかったので、パリ市は1850年まで通行料を徴収した。この橋は優雅な出来映えだったが、揺れがひどかったのが欠点だった。

39) fontaine Richelieu：第1区のリシュリュエ街37番地にあった。トラヴェルシエール（現在のモリエール）街とリシュリュエ街の交叉点の角に1671年に建設された。当時の泉は挿絵でみると蛇口があってそこから出る水を容器に受けているので、公共の水汲み場であるが、1844年1月15日、イタリア出身の建築家ヴィスコンティ（1791-1853）の手によって製作された。モリエールの坐像はセリュール（1795-1867）の、悲劇と喜劇を示す立像はプラディエ（1792-1852）のそれぞれ手になる作品である。

40) fontaine de Saint-Sulpice：第6区にあるサン・シュルピス広場の中央に、1844年に前記のヴィスコンティにより建造された。4人の聖職者の雄弁家ボシュエ、フェヌロン、フレシエ、マシヨンの像が壁龕の中に飾られ、四隅を坐ったライオン像が据えられている。これは前のリシュリュエの泉とはちがいで、堂々たる噴水である。

41) église Sainte-Marie-Madelaine：通称ラ・マドレーヌ。第8区のロワイヤル街のつきあたりに在り、パリ有数の観光スポット。縦108米、外側の横幅43米、内側の横幅21.5米、高さ30.3米。巨大な正面の3角破風を飾るのは、ルメール作の群像で、イエスキリストにかしづく聖女マドレーヌをあらわしている。ギリシャのパルテノン神殿を手本とし、コリント様式の高さ20米の円柱52本の柱廊をめぐる堂々たる記念建造物である。

6世紀以来、パリ司教は首都の郊外の小さな所領を持ち、ここに小さな町ができて「司教の町」*La ville-Eveque*と呼ばれたが、この町の礼拝堂が1238年頃、聖女マドレーヌに奉献された。この礼拝堂は教会となり何度か増改築されたのは町も発展し住民も増加したからである。やがて教区が設置され（1639）、1660年8月10日に、モンパンシエ夫人、



人呼んで「グランド・マドモワゼル」ことアンヌ・マリ・ルイズ・ドルレアン（1627—1693）が最初の礎石を据え建設工事が開始された。しかしこの界限の発展が加速し、立派な豪邸が續々と建造されるにつれ、当初のあまりにも小規模な計画は見直され、1764年、この教会はロワイヤル街の快適な終点になるように決定され、同年4月3日、ルイ15世によって定礎式が挙行された。

オルレアン公御抱えの建築家コンタン・ディヴリ（1698—1777）が監督し、彼の死（1777.10.1.）後はクーチュール（1732—1799）が引き継ぐが、建築アカデミーの要請によりローマ十字形の最初の計画を変更、パンテオンのようなドームを持つギリシャ十字形の教会とする事になった。しかし大革命により工事は中止され、未完成の建物は民間に賣却され取り壊されてしまった。

帝政時代初期、ナポレオンは、株式取引所、商事裁判所、フランス銀行などの建物と共に、自己の大軍団に捧げる「栄光の神殿」Temple de la Gloireの建立を命じた（1806.12.2.）。彼は、その建物は教会でなく、パリに未だ存在しない、アテネにあるような神殿を造営する事、と明瞭な指令を出したのである。設計コンクールが実施され、当選者のピエール・アレクサンドル・ヴィニョン（1763—1828）の案にもとづき、壮大なローマ神殿風様式の建物の工事が再開されたのである。

ナポレオンの没落と共に工事は一時中断するが、ルイ18世はヴィニョンに引き続き監督するように命じて、神殿ではなく最初の聖マドレーヌに奉献する教会に変更するように指示した。ヴィニョンは22年間この建設工事に従事したが、完成を見ることなく死去（1828.5.21.）、ユヴェ（1783—1852）が後任となり、1842年、実に最初の礎石が据えられてから85年後に完成したのである。28段の巨大な正面階段の上からコンコルド広場を見渡し、更にブルボン宮からアンヴァリッドまでの眺望は、パリの都市美の一つの極致である。

42) collège de France : 1530年3月、フランソワ1世が、ユマニストの古典学者ギョーム・ピュデ（1468—1540）の請願により、パリ大学神学部の干渉を受けず講義をする事が出来る教育機関の設立を認可した。創立当初はギリシャ語、ヘブライ語、数学の3教科で、担当教授5名というささやかなこの機関は王立教授団 *lecteurs royaux* と呼ばれ、ユマニズム発展と共に研究と教育が必要になった古典語講座が先ず開設されたのである。講義は誰でも無料で聴講できる公開講座で、教授資格もまた形式的免許や学位は無用だった。中世的頑迷で独善的スコラ哲学と神学の牙城であるパリ大学に対し、王立教授団はルネサンスの息吹きを伝える自由かつ清神な学問研究の場となった。講座数は、ラテン語、

東洋語、医学など、時代と共に拡充強化され、現在では自然科学、哲学・社会学、史学・言語学・文学の3部門で約47講座が開講されている。

名称は、王立教授団から、「3箇国語学院」Collège de trois langues、1610年から「王立フランス学院」Collège royal de France、大革命時代には「国民学院」Collège national となり、帝政時代には「帝政学院」Collège impérial と名称を変えたが、第3共和政以降は現在の「フランス学院」になった。初期の頃は専有の教場を持たなかったが、ルイ13世の時代、カンブレー学寮跡に「石造の」教場が建築され、1778年、1831年、1877年、1939年と増改築がなされ現在に至っている。それぞれの時代の碩学が教鞭を執ったが、19世紀以降でも、文科系の講座の教授にも、生理学者クロード・ベルナル（1813-1878）、歴史学者ジュール・ミシュレ（1798-1874）、宗教作家で作家のエルネスト・ルナン（1823-1892）、詩人ポール・ヴァレリー（1871-1945）、哲学者アンリ・ベルグソン（1859-1941）などがおり、理系では物理学者のフレデリック・ジョリオ・キュリー（1900-1958）などがいる。

43) Le Panthéon：第5区にある同名の広場の中心に聳える。以前はサント・ジュヌヴィエーヴ修道院の教会が建っていたが、1180年頃にフィリップ・オーギュストが改修した後は長い間補修もされずに放置されていたため、非常に荒廃してしまった。ルイ15世（1710-即位1715-1774）がまだ「いとしき君」le Bien-Aiméと呼ばれていた1744年のオーストリー継承戦争のさなか、フランス軍を指揮するためメッツに出陣した時、8月8日、国王は突然発病し、一時は危篤に陥った。この悲報を聞いたパリ市民は、国王の治癒を祈願してあらゆる教会に参拝した、と伝えられる。ルイ15世自身も、もし回復することがあれば、荒廃しているサント・ジュヌヴィエーヴ教会を壮麗な教会に再建する、と神に誓願したといわれる。おそらく、フン族の掠奪からパリを守った聖女ジュヌヴィエーヴの功德に国王は縋ったものと思われる。国民の熱烈な祈願とルイ15世の願いが叶ったのか、彼は奇蹟的に全快し、この朗報が伝わるや、パリ市民たちは「いとしの君萬歳！」を叫んだのである。11月13日パリに凱旋した国王は全市をあげての熱狂的な歓迎を受けた。

健康を取り戻した国王は自分の誓願を果すべく、愛妾ボンパドール夫人（1721-1764）の弟で建築総監マリニー侯爵フランソワ・ポワソン（1727-1781）に、新教会の建設を一任した。侯爵は自分が目をかけていた建築家スフロ（1713-1780）を指名する。建設資金は宝くじを発売して集めたが、1回では足りず3回も発売しなければならなかった。

工事は1755年に開始されるが、スフロは予想外の難問に遭遇する。それは、建設予定

地としていたサント・ジュヌヴィエーヴの丘の頂上附近に、深さ 25 米にも及ぶ陶土の採掘坑が口を開いていたからである。1600 年ほどのガロ・ロマン時代に壺や陶器を製造していた職人たちが、製品に好適な材料の陶土を掘り出すため、幾つもの井戸のような採掘坑をそこかしこに掘っていたのである。これらの大穴を埋め戻し、かつ軟弱な地盤の土地に、大記念建造物を支えるのに十分な強度をもつ土台を構築するために、第 1 回の宝くじで得た資金は消えてしまったのである。

1764 年 9 月 6 日、ようやくルイ 15 世はこの教会の定礎式を挙げてきたが、足場に布を貼って、完成時の教会の姿を描いた画の前で行ったにすぎない。この頃は、失政続きのルイ 15 世の人気は下落しており、誰も「いとしき君」などと国王を呼ぶ者はなく、この式典にも僅かな人しか出席しなかった。スフロ自身も難工事に加えて、彼の設計に反対するリヴァルたちの執拗な攻撃に心身共に消耗し、1780 年 1 月 5 日、完成をみることなく世を去った。

工事は、スフロの弟子ジャン・バチスト・ロンドレ (1743—1829) らを中心に續行され、大革命の勃発した 1789 年にやっと完成する。しかしこの時の建物は現在のものとは可成り違ったもので、高くて広い 42 の「大窓」baies を持ち、高さ 40 米の鐘楼 2 基、2 つの脇門があり、正面破風はギョーム・クストー (1678—1746) の浅浮彫り、天使に取り囲まれ、光を放っている十字架、で飾られていた。

この教会が、祖国に貢献した偉人たちの霊を祭る霊廟になったのは、1791 年 4 月 4 日の国民議会の議決による。遺骸を安置する地下墓地の建設を含めて、パンテオンの改造を施したのが建築家のアントワヌ・カトルメール・ド・カンシーである。彼は鐘楼を取り壊し、大窓と脇門を塗り固めてしまい、代って正面破風の新しい装飾をつけ、「偉人たちに、祖国は感謝を捧ぐ」Aux grands hommes, la Patrie reconnaissante の碑銘をつけた。

パンテオンに最初に祭られたのはミラボーだが、1794 年 9 月 21 日に撤去されてしまう。1791 年 7 月 12 日にヴォルテール、1794 年 10 月 11 日にジャン・ジャック・ルソーが祭られる。かつての宿敵同士が安らかにパンテオンの地下墓地で眠っているのも不思議な縁である。その他の偉人としては、ヴィクトール・ユゴー (1885)、ゾラ (1902)、ジョーレス (1942) など。1996 年 11 月にはアンドレ・マルローが祭られた。

建物本体は、長さ 110 米、幅 82 米、高さ 83 米で、11 段の階段を持つ正面玄関入口の列柱は、ローマのパルテノンから着想を得ている。高さ 20 米のコリント柱式の円柱は、18 本が 1 本づつ立っており、4 本が一緒になっている。列柱の奥に 3 つの青銅の門があ

り、5つの浅浮彫りと花輪模様で飾られているが、作者はマンドロン、クロヴィスの洗礼、サント・ジュヌヴィエーヴとアッチラを彫り出している。

内部の装飾で最も有名なものはビュヴィ・ド・シャヴァンヌ（1842—1898）の筆になるサント・ジュヌヴィエーヴの一生を描いた連作で、特に注目される画面は、「パリに食糧をもたらしたサント・ジュヌヴィエーヴ」*Sainte Geneviève ravitaillant Paris*、「パリを見守るサント・ジュヌヴィエーヴ」*Sainte Geneviève veillant sur Paris*である。

ドームの天井画も素晴らしいが、秋晴れの夕暮時、サン・ルイ島のオルレアン河岸から眺めた青空の背景に聳え立つパンテオンのドームの美しさが、今も忘れられない。

44) 「金持ちになりたまえ... ! Enrichissez-vous はギゾーの反対派が彼を攻撃するため、言辞の中から抜きとった揚げ足取り的な非難だった。「ギゾーはどこまでも中庸主義の化身で、賢明で、現実主義で、はったりをしてみる気など毛頭なく、少しも囂したたりしなかった。この人間は知力と高貴さと無私無欲をそなえていた。」(アンドレ・モーロワ著『フランス史』、平岡昇、中村真一郎、山上正太郎共訳、昭和28年刊、新潮出版、下巻、492頁。) モーロワなら、この言葉をギゾーのスローガンとはみなさないだろう。「労働と儉約によって金持ちになりたまえ、そうすれば国政選挙の有権者になれますぞ。」とギゾーは言ったそうだが、これは彼の支持層のブルジョワ階級には通用しても、低賃金と苛酷な労働条件に苦しんでいた一般大衆には夢物語といえよう。

45) この訴訟事件は、1847年5月4日、貴族院特別法廷で開始された岩塩鉱山不正払下げ事件である。公共事業相だった弁護士ジャン・パティスト・テスト（1780—1852）が在職中（1840）にオート・ソヌヌ県の Gouhenans にある岩塩鉱山を、陸軍大臣だったアメデルイ・デパン・ド・キュビエール将軍（1786—1853）の依頼を受け、将軍が共同経営者として参加している会社に払い下げた。その時94,000フランの賄賂を受け取ったという。キュビエール将軍も賄賂の一部を着服した。払い下げは1843年1月3日に実行された。この贈収賄は、1847年5月1日の『権利』*le Droit* 紙に一大スクープとして発表され、朝野を震撼させた。何故なら疑惑の中心人物は共に政界の大立物だったからである。

キュビエール将軍は軍人や学者を輩出した名家の生れで、彼自身も、ナポレオン麾下の勇将で、特にアイラウ（1807）、エスリング（1809）、モスクワ（1812）、ワーテルロー（1815）の各会戦で武功をたて、7月王政下ではあの困難なアンコナ撤退作戦を見事に遂行し江湖の賞賛を浴び、陸相の重責を2度も果たした軍人である。一方のテストも父は政治家、兄は軍人と優秀な一族の出で、若い時からその雄弁で鳴らした弁護士。百日天下の時

にナポレオンに見込まれヨンの警察署長に任命され王党派の取り締まりに当たった。王政復古時代はベルギーのリエージュに亡命、その地で弁護士を開業、その有能さを買われ、国王ギョームからロアン家をオルレアン家の領地争いの訴訟解決を一任されている。この時、彼はオルレアン家の側に立った縁で、7月王政の成立と共にフランスに帰国、ルイ・フィリップに重要され、経済相(1834)、法相(1839)、公共事業相(1840)を歴任、43年にはフランス貴族に任じられ、破毀院長に就任していた。

『権利』紙のスクープは、キュビエール将軍に対しその資金の使用に疑念を抱いた協同経営者の1人からの密告だった。岩塩鉱山払い下げについて便宜をはかってくれる政府の要人に心当たりがあるからしかるべく依頼してみる、という内容の将軍の手紙が紙上に掲載され、その要人はテストである事が明白だったのである。1847年5月4日、貴族院特別法廷に出廷したテストは徹底的に収賄容疑を否認、7月8日の再度の法廷でも雄弁を揮って無罪を主張したが、94,000フランの賄賂を自分に手渡したキュビエールの協同経営者の告発状と彼自身の受取証をつきつけられ遂に屈服した。自分の控え室に戻った彼はピストル自殺をはかったが失敗、その不手際にルイ・フィリップは不快感を示したという。判決はキュビエール将軍に市民権剥奪と10,000フランの罰金、テストは禁錮3年、罰金94,000フランと同じく94,000フランをバリの慈善病院に寄附する事を命じた。7月17日の事である。身柄はコンシエリジュリ監獄に収容され、1849年8月13日までここに留置されていたが、時の大統領ルイ・ナポレオンのはからいで、シャイヨの精神病院に移送され、また大統領は罰金を50,000フラン免除してやっている。1850年7月に釈放されたが、その2年後に没した。キュビエール将軍は、1852年8月17日にルアンの高等法院で名誉回復の復権の判決を得ている。このスキャンダルは政界上層部の醜悪な腐敗ぶりを天下に公示し、国民の怒りを買うと共に、7月王政の崩壊を加速する一因となった。

46) les jésuites : イエズ会 Compagnie de Jésus の会員を指す。スペイン貴族イグナチウス・デ・ロヨラ(1491頃-1556)がフランシスコ・ザビエル(1506-1552)ら同志6人と共に設立、ローマ教皇パウルス3世によって認可された(1540.9.27.)。「イエスの軍隊」を名乗るこの新教団は、文字通り軍隊の厳格な規律と練習を会士に課し、新教に対する旧教の革新派として、カトリックの布教、特にヨーロッパ以外の外国での伝道に努力した。また青少年の教育に尽力し、17世紀から大革命までフランスの教育を独占し多くの人材を養育した。イエズ会士は国王や王妃の告解師や宮廷付き司祭となり、やがて国政に介入、新教徒弾圧から言論統制までを監督し、絶対王政の一翼を担った。イエズ

会士のこのような活動はやがて横暴の域に達し、遂に1763年にルイ15世によって解散させられ、1773年にローマ教会も解散を命じた。しかし19世紀に入り復活が認められ、政治に関与しないという了解の下に活動は認可された。

47) エコル・ノルマルの歴史・哲学講座担当教授として令名の高かったジュール・ミシュレ(1798-1874)が、コレージュ・ド・フランスの史学・倫理学の教授に任命されたのは、1838年2月13日の事である。反動的性格を強めてきたルイ・ナポレオン政府の決定により、1851年3月31日に「世論が烈しく怒っている偏向的言辞を弄した」故をもって解職されるまで、その斬新明快な講義は、知識人、学生のみならず一般のパリ市民の傾聴するものであった。民主主義的また反教會的政治思想と歴史の原動力としての民衆の熱烈に賞賛する彼の講義は、帝位への野望をふくらませていたルイ・ナポレオンにとって、はなはだ危険な革命の萌芽を育てる温床に映じたのである。議会でも講座の中止反対の声があがったが、無駄だった。

48) Gustave Xavier Lacroix de Ravignan (1795-1858)：フランスの説教家。1822年イエズス会入会、1828年に司祭となり、パリのノートル・ダム寺院でラコルデルの後任になった。1844年『イエズス会の存在と組織』*De l'existence et de l'institut des Jésuites*を発表し反響を呼んだ。1848年パリ・イエズス会総長になる。信仰の指導者として最も偉大な19世紀の説教師の1人である。

49) Jean-Baptiste-Henri Lacordaire (1802-1861)：ドミニコ派の修士で新教師。法律を学び弁護士になったが、信仰生活に入り、サン・シュルピス神学校で学び、1827年に司祭になる。ラムネーに勧誘され『未来』*L'Avenir*紙の編集に従事、カトリックと自由の和解に努力するが、ラムネーがローマと対立し教会から離脱した時(1832)、彼はこの師と決別した。1835年ノートル・ダム寺院から招かれ『講演』*Conférence*を行い従来の説教を一変させる清新な雄弁を揮った。「説教壇のロマン派」と彼は呼ばれるようになる。師ラムネーのスローガン「神と自由」を共和主義へ走った師よりより穏和に自由主義とカトリックの融和を目指したラコルデルの四句節の『講演』(1835.3.8.)はつめかけた6,000人の満員の聴衆を魅了し、信者の信仰心を燃え立たせ、無神論者や罪ある人々をカトリックに帰依させたという。その後、彼はローマでドミニコ会入会し、フランスで再興を決意、帰国後、ナンシー、パリ、ディジョンなど各地でドミニコ会修道院を設立、ドミニコ会管区長に就任した。1860年にトックヴィルの後任としてアカデミー・フランセーズの会員に選出されている。『ノートル・ダム説教集』*Conférences de Notre-Dame*

*de Paris* (1835-51) などの著書がある。

50) ショワズール・プララン公妃殺人事件：1847年8月17日、フォーブル・サン・トノレ街55番地のショワズール・プララン公の邸宅の寝室で、公爵夫人が屍体で発見された。屍体は短刀で文字通り30箇所も切り刻まれ、血の海の中に横たわっていた。ピストルの台尻の強打で絶命した、と警察は判断した。ヴィクトール・ユゴーによると(『日記』*Journal*や『手帳』*Cornet*, 前記のユゴー全集第7巻911-2頁, 1042-1045頁), 夫人は肥りぎみの美人で瘦気味の公爵と対照的だったという。部屋の荒れた状態や凶器の使用法から、犯人は素人という警察の推定通り、公爵本人が犯人として逮捕された。聞き込みなどの調査の結果、公爵夫妻は以前から不和で、公爵が子供たちの家庭教師である Deluzy-Desporte 嬢を愛人としており、彼女はそのため正妻の公爵夫人をないがしろにしていた事は周知の事だった事が判明した。夫人の父陸軍元帥セバスチャニ伯爵(1772-1851)は、もしこの不倫関係を続けるなら、娘を離婚させて手元に引き取り、同時に巨額な持参金も返還してもらおう、と公爵に警告していたという。この邸もやがてエリゼ宮建設で取り壊されてしまうのだが、セバスチャニ伯爵の邸だったらしい。追いつめられた公爵が遂に凶行に及んだとみられる。逮捕された公爵は岩塩鉱山事件で留置されたテストと同じリュクサンブール宮の貴族用監獄の部屋に拘禁されたが、砒素を飲んで8月24日に死亡した。

殺害された公爵夫人の父 Bastien François Horace, comte Sébastiani はナポレオンと同じコルシカ出身で、皇帝に愛された忠臣だった。多くの会戦で武勲をたて、7月王政では外相や、ナポリやロンドン大使を歴任、1840年に陸軍元帥になった。婿のショワズール・プララン公爵シャルル(1805-1847)はフランスの名門貴族で、先祖は遠く12世紀末まで遡る家柄である。先の陸相と経済相の贈収賄事件のキュビエール・テスト事件は、陸軍と官僚の腐敗を露呈し市民の嘲笑を浴びたが、ショワズール・プララン公爵夫人殺人事件は貴族階級の道徳的退廃を白日の下に曝して庶民の怒りを買ったのである。特に公爵の残虐さが非難的になった。この2つの事件は支配階級の腐敗墮落の象徴的犯罪として、社会に強い衝撃を与え、7月王政崩壊の蟻の一穴となった。

51) François Marie Charles Fourier (1772-1837)：フランスの空想的社会主義者。ブザンソンの裕福なロシア商人の家に生れるが、大革命時代、不幸な投機により財産を失う。1793年、リヨンの暴動に参加、逮捕投獄されたが、処刑の寸前に脱走した。その後、リヨンやパリの商会の手代となり、苦しい独身生活を送った。独学でルソーの楽天主義や

18世紀の思想を学び、『4箇運動と一般的運命理論』*Théorie des quatre mouvements et des destinées* (1808) で自己の理想社会を描いた。また『産業的組合的新世界』*Le nouveau monde industriel et sociétaire* (1829) ではこれまでの著作の総合として、ファランジュという農村的協同組合社会の建設を主張した。この社会では各人が自由に労働を選択、競争により高品質な製品を生産、全員が株主となって配当を得て生活する平等な協同体が提唱された。しかしこの構想実現のための資金集めに失敗、貧窮のうちに歿した。しかし彼の理念はマルクスやエンゲルスにも強い影響を与えた。

52) Jean Joseph Charles Louis Blanc (1811-1882)：フランスの社会主義者、歴史家。パリで法律を学び、ジャーナリズムの世界に入り、社会主義的雑誌『進歩』*Revue du Progrès* を創刊 (1839)、同誌に発表した論文をまとめ、『労働の組織』*L'Organisation du travail* (1840) を刊行、国立作業所、労働省の設置を主張した。2月革命後の臨時政府の一員になったが、国立作業所の閉鎖による労働者の暴動 (1848.6.23.-26.) を煽動したという陰謀罪に問われる危機を逃れ、ベルギーついでイギリスに亡命、第2帝政没落後に帰国、国民議会議員になったが (1871)、パリ・コミューンの乱の時にはヴェルサイユ政府側に立った。79年にコミューン叛徒の大赦を提案し実現させた。『フランス革命史』*Histoire de la Révolution française* (1847-1862, 12巻) などの著書がある。

53) Auguste Casimir Périer (1777-1832)：フランスの政治家。グルノーブルの富裕な商家に生れる。フランス銀行の創業者クロード・ペリエの息子で、兄アントワヌ (1770-1821) と共に銀行を経営した。1817年パリ選出の代議士となり王政復古政府の野党の指導者の1人になる。7月王政に参加、無任所大臣から首相兼内相となり (1831-32)、リヨン、グルノーブルの労働者の暴動を鎮圧 (1831)、ブルジョワ階級の信頼を得た。ベルギーに出兵しその独立運動を支援、オーストリーを牽制するため中部イタリアのアンコナを占領した以外は、不干渉政策をとった。32年のコレラ流行の時、市立病院の患者を見舞って感染し5月16日に死去した。

54) le banquet：1845年夏の馬鈴薯の不作と翌46年夏の小麦とライ麦の不作のため、47年には穀物価格は前年春の3倍に高騰し、パンを買いなくなった大衆は衣料品や手工業製品を買い控え、これが導火線となって、農業、商業、工業の恐慌が連鎖し、フランス社会は経済危機に直面した。このため全国各地に騒動が頻発したが、政府にはこれを解決する手段も対策もなかった。

このような政府の無能に対し、政府の革新を求める声があがる。そのため改革論者が主



張したのは議会制度と選挙制度の改革である。第一は高級官僚が現職のまま代議士になる兼職の禁止で、第二に有権者になるため納税額の引き下げと、教授、医者、公証人、国民衛兵軍の士官たち、いわゆる「能力者」capacitésに投票権を与えることである。これらの要求に対してギゾーが言い放ったのが、「金持になりたまえ…」の返事だったのである。しかし一応の改正により有権者数は166,000人から241,000人に増加するが、普通選挙には程遠いものであった。

かくしてより完全な議会と選挙制度の改善を求めて開催されるようになったのが、「宴会」banquetの形をとった改革運動の集会である。改革に徹頭徹尾反対しているギゾー内閣を打倒するため、ルイ・フィリップから首相の座を追われていたティエールも参加する。この「宴会」はほどなく制度改革の要求にとどまらず、内閣打倒、7月王政打倒という革命運動の母胎となっていく。1847年7月18日、故郷のマコンで開催された「宴会」で、詩人のラマルチヌは政府の腐敗を弾劾しオルレアン王家の失墜を予言したのである。この運動に過激派とみられていた共和主義者も参加してくる。彼らは7月革命のやり残した王政打倒と普通選挙制の実現を要求した。さらに教育の自由を要求するカトリックの一部さえも参加するのである。この「宴会」は各地で開催され政府攻撃の煽動を続け、やがて48年の2月革命へと突進していく。

55) rue Neuve-de-Clignancourt : パリ第18区にある長さ1,325米、幅12米から32米のクリニャンクール街の延長工事により、この道路に吸収され、現在は存在しない。テキストにはNeuve-Clignancourtとあるが、正確には間にdeが入る。

56) le Chateau-Rouge : 現在のクリニャンクール街42番地から54番地に煉瓦と石でつくられた美邸で、パリ代官代理クリストフが1580年に建築した。周囲は広大な庭園だった。伝説によるとこの邸でアンリ4世が愛人ガブリエル・DESTREと密会したという。1814年3月末、ナポレオンの弟ジョゼフが連合軍への反攻のための司令部を設置した。1844年にこの邸と庭園を購入した会社が上地を分譲し、その時にヌーヴ・ド・クリニャンクール他3本の道路を造成した。1845年に新所有者のBobœufなる人物がこの邸をダンス・ホールに改造、庭園も野外ダンス場にして、シャトー・ルージュ・ダンス場、別名ニュー・ティヴォリと称し、1848年から64年まで大いに繁昌した。1847年7月9日にこの庭園で開催された最初の「宴会」はラ・モンターニュ・クラブの幹事サルジなる人物である。会費は1人5スー、1,200人が参加、うち代議士は86名だった。この集会の影響は大きく、やがて全国で「宴会」が開催され、約70回の宴会に22,000人が参加したと

いう。因みにこのホールは人気がなくなり、1882年に閉鎖されて取り壊され、跡地に分譲住宅が建築された。

57) マコンの宴会でラマルチーヌが述べた演説の言葉である。「この王権は、必ずや、血潮の中でなくみずからの奔の中に倒れるでしょう。そして、自由の革命と光栄の反革命を経験した後、諸君は公德心の革命と軽蔑の革命をけみすることでしょう。」前掲のモーロワ『フランス史』下巻、496頁)。

58) 1848年2月23日：政府の禁令にも不拘、前日市中をデモした学生や労働者らは、この日再び結集し、ギゾーが退陣した事を知り歓喜のデモを再開した。参加者の中からギゾーの邸まで押しかけようと声があがり、デモ隊は第2区と第9区にまたがるキャプシーヌ大通り37番地から43番地に建つ建物に行こうとした。この建物は、1820年から53年まで外務省が入っており、外相を務めたギゾーは首相になってからも此処に住んでいた。しかしデモ隊の行動を予測していた政府は防備のため歩兵第49連隊所属第14大隊を配置していた。午後9時半頃、警備の部隊とデモ隊が睨み合った時、突然デモ隊の中から発砲があり、兵士の1人が倒れた。銃を構えていた兵士たちはこれに応戦、一斉射撃を開始、たちまち凄惨な修羅場が展開した。デモ隊に死者53名と負傷者多数が出る。デモ隊は殺戮の犠牲者の屍体を車に乗せてパリ市中を引き回し、武器を取り、ルイ・フィリップを打倒せよ、と絶叫した。ギゾーの退陣で沈静化しかけた騒乱の空気はこの虐殺事件で忽ち暴動へと転化していく。七月王政を打倒する2月革命の勃発である。

59) パリの暴動鎮圧のため、鎮圧部隊の司令官にビュジョ元帥を国王は任命したが、この任命はルイ・フィリップの大きな誤算だった。パリ市民たちはあのトランスノナン街の虐殺の張本人だった元帥を決して忘れてはいなかった。市民の怒りの前では、アルジェリア征服の英雄も無抵抗の無辜の民を皆殺しにした犯罪者にすぎなかったのである。鎮圧部隊の兵士たちは戦意もなく間もなく逃走してしまう。更に頼みとする国民衛兵部隊が離叛するのを見て、ルイ・フィリップも遂に譲位するに至るのである。

60) 2月24日、国王は孫のパリ伯爵ルイ・フィリップ・アルベール(1838-1894)に譲位する旨を宣言して退位するが、パリ伯はまだ少年のため、母のオルレアン公妃が攝政とならねばならなかった。幼王と攝政の承認を得るため、公妃は義弟のヌムール公と2人の王子をつれブルボン宮へ赴く。この聡明で美人の公妃マリ・アメリを敬愛する人々も多く、ヴィクトール・ユゴーもその1人だった。公妃たちはブルボン宮で多くの代議士たちから快く迎えられ、7月王政の継続が承認されかかった時、武装した群衆が会議場に乱入

し形勢が逆転，社会主義者の代議士ルドリュ・ロランが臨時政府の樹立を提案，ラマルチエヌらが支持し，立憲王政は拒否されてしまったのである。他方，パリ市庁舎でも社会主義者たちが臨時政府を立ち上げていた。かつてのヴェルサイユ政府とパリ・コミューヌの血の対立を避けるため，ブルボン宮の臨時政府はパリ市庁舎に急行，妥協が成立し，ブルボン宮と市庁舎のメンバーから選ばれたメンバーで一つの臨時政府が成立，第2共和政が発足したのである。

(続　く)

(追　記)

(1) 参考図書などは，〔I〕の巻末に掲載してありますので，そちらを御参照下さい。

(2) 前稿〔XXII〕に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

- p. 9. 上から 4 行目　　solde  
p. 11. 下から 11 行目　　自覚  
p. 12. 上から 4 行目　　グレゴリウス  
p. 26. 下から 13 行目　　…とした。

— 2008.6.16. —